

現象学と内包の論理学

— Phänomenologie und Inhaltslogik —

矢 島 忠 夫*

序 言

フッサールの『算術の哲学』（1891年）は、フレーゲによる算術の基礎づけに対する挑戦の書である。その対立は論理学の基礎づけの問題に由来し、「外延の論理学と内包の論理学とは、いずれが根源的か」という問いに集約することができる。「外延の論理学」はその直接の基礎づけを概念の外延に求める。それゆえ、そこでの論理計算もまた、外延の計算という意味を持つ。これに対し、「内包の論理学」は、概念の内包が、論理学の根源的かつ直接の基礎でなければならず、またありうることを主張する。この論理学にとっては、外延の計算は間接的迂回であり、ア・プリオリに必然でも不可避でもないがゆえに余計な迂回である。フッサールは既に『推論計算と内包の論理学』（1891）と題された論文において、外延計算と同じ諸公式にとりながら厳密に内包の論理学に依拠する推論計算を確立する可能性を探求していた。

しかし、『論理学研究』第一巻（1900）は『算術の哲学』における、フレーゲへの原理的批判の撤回宣言から出発している。小論の課題は、「この自己批判によって、内包の論理学の構想そのものが撤回されたのか」否かの問いに答えることである。そして答えは「否」である。すなわち、フッサールがそこから脱却した誤謬は、その「心理主義」であって「内包の論理学」ではない。そのように解してはじめて、『形式論理学と超越論的論理学』（1929）において、『算術の哲学』が、始動しつつある「現象学的構成的研究」と評価される理由が理解できるのである。論理学の根源的かつ直接的基礎を概念の内包に求める姿勢を堅持することなしには、諸概念に根源的内容を与える構成作用の研究としての現象学そのものも成立しえなかったことであろう。

「内包の論理学」素描

ここでは、フッサールの「内包の論理学」の構想がどのようなものであったか、その概念を与える。依るべきテキストは、『論理学小論集』（Articles sur la logique, paris, P.U.F., 1975, trad. Jacques English）所収の論文『推論計算と内包の論理学』（Le calcul de la conséquence et la logique du contenu, 1891）である。

彼の課題は、内包計算の不可能性、クラスへの迂回の不可避性をア・プリオリに論証しようとする、外延の論理学の信奉者の論駁である。したがって、外延計算と同じ諸定式をそっくり借用し、「厳密に内包の論理学に依拠する純粋推論計算を構築しよう」（C.L., p. 64）ことの証明である。まず、クラスとその関係は、集合とその関係の特殊事例にすぎない。したがってクラス計算は集合計算（Mergencalcul）のひとつの特殊な応用にすぎない。したがって、概念の内包を、「理念的諸内包」すなわち、「概念の対象の弁別的諸特性（*marques distinctives*）の全体」とみなし、そこに、集合計算のもう一つの応用分野を考えることができる。そして、理念的の内包の無限性と、現実には与えられる事内的内包の有限性ととの対比から、内包の論理学のア・プリオリな不可能性を結論することはできない。なぜなら、クラス計算においても、クラスの要素のすべてが現実には与えられている必要はなく、それらの「全体についての一義的に決定された記号的表象（*symbolische Vorstellung*）」で十分である」（C.L., p. 67）からである。『算術の哲学』は、現実的無限性（*aktuelle Unendlichkeit*）が計算そのものを無益にすると語っている。「数系列の最初の数についてと同じように、あらゆる数について本来的表象を持っていたなら、およそ算術などは存在しなかったろう。けだし、算術はまったく余計なものであったろうから。」（HU. XII., S. 191）次に、外延への迂回ばかりでなく、「理念的諸

* 弘前大学教育学部社会科学科教室

内包」への迂回すら無駄である。なぜなら、形式論理学の定式「 SaP 」は、推論技術の諸目的に応じてさまざまな解釈をうけうるが、そのうちの多くは迂回による解釈だからである。そこで、第二の課題は、内包の論理学のために、迂回を経ない直接的解釈を見いだすことである。

以下に「 SaP 」の諸解釈を提示する。ただし、[]内は、筆者の補足であり、その他若干の修正を加えた。(C.L., p. 69-71)

I. 純粋内包的解釈

(A) 内包の量化なしの〔通常の意味での内包による〕

(a) 「或るものが S である（それが弁別特性 S を持つ）なら、それは P である（それは弁別特性 P を持つ）」

$$[(x)(S(x) \supset P(x))]$$

(b) 「或るものが S であり、かつ P でないことは、真でない」

「 S である非 P は存在しない」

$$[\sim(\exists x)(S(x) \cdot \sim P(x))]$$

(B) 内包の量化をともなう〔理想的内包による〕

「 S の理想的内包は、 P の理想的内包を包含する」〔すべての x について、もし x が P の理想的内包であるなら、それは同時に S の理想的内包である〕

$$[(x)(P(x) \supset S(x))]$$

「或る S に属する弁別特性の全体は、或る P に属する弁別特性の全体を含む」〔すべての x について、もし x が P の弁別特性全体の集合に属するならば、それは同時に S の弁別特性全体の集合に属する〕

$$[(x)(x \in \{x|P(x)\} \supset x \in \{x|S(x)\})]$$

II. 純粋外延的解釈

(a) 包摂の形式

「 S のクラスは P のクラスに包摂される」

$$[\{x|S(x)\} \subset \{x|P(x)\} \text{ あるいは } S \subset P]$$

(b) 同一性の形式

(α) 「 S のクラスは S である P のクラスと同一である」

$$[\{x|S(x)\} = \{x|S(x)\} \cap \{x|P(x)\} \text{ あるいは } S = S \cap P]$$

(β) 「 S である非 P のクラスは空である」

$$[\{x|S(x)\} \cap \{x|\sim P(x)\} = \phi \text{ あるいは } S \cap \bar{P} = \phi]$$

III. 混合的解釈

(a) 「すべての S は P である」つまり「或るものは S の全体に属するかぎり、弁別特性 P を持つ」

$$[(x)(x \in \{x|S(x)\} \supset P(x))]$$

「 S の全体の要素で弁別特性 P を持たないものは存在しない」

$$[\sim(\exists x)(x \in \{x|S(x)\} \cdot \sim P(x))]$$

(b) 「或るものが S であるかぎり、それは P のクラスに属する」

$$[(x)(S(x) \supset x \in \{x|P(x)\})]$$

以上が、フッサールによって与えられた全称肯定命題「 SaP 」の解釈のすべてである。それらは、その命題形式の違いにもかかわらずすべて等価である。それゆえ、相互の「等価変換」(transformation équivalente) (C.L., p. 73) が可能となる。ところで、命題形式を最小限にし、それらを画一的モデルに基づいて作製することが計算の論理学の理想であり、計算はクラスへの迂回によってのみ可能であると考える者にとっては、あらゆる判断形式をクラスの判断へと等価変換することが、計算の論理学の不可避の課題となる。フッサールは、このような事態が、「根源的思考の流れ」「自然な論理的思考からの逸脱」(C.L., p. 74) をもたらすと考える。彼にとっての理想は、「自然的思考のもっともプリミティブかつもっとも日常的な諸形式に基づく演繹計算を基礎づける」(C.L., p. 75) ことである。上記の解釈のなかで、もっともプリミティブとみなされるのは、

(I a) 「或るものが S であるかぎり、それは P である」、つまり

$$(x)(S(x) \supset P(x))$$

と記号化する解釈である。これは、否定命題に対する肯定命題、定言命題に対する仮言命題、外延のないし混合的解釈に対する内包的解釈の根源性を意味する。

そればかりか、「内包の論理学」に対する「対象の論理学」の根源性が主張される。すなわち、(I a)は、「概念Sの或る対象は、そのかぎりで、概念Pの対象でもある」

を意味する。確立さるべき計算は、「概念の対象の計算」である。なぜなら、「あらゆる判断作用は、クラスでも、概念の内包でもなく、ただひたすら概念の対象のみに基づいているからである。」(C.L., p.76) この対象計算は、(一般的計算であるかぎり)任意の概念の対象が相互に持ちうる関係のみに依存し、諸対象の特殊性にかかわらない。ここに、純粋に形式的かつ仮言的計算が可能となる。

フッサールは、任意の二つの概念SとPの対象が相互に持ちうる五つの関係を提出し、それらの関係と、概念の外延のためのオイラーの五つの図との正確な対応を主張する。(C.L., p.77) これは、対象計算、内包計算、クラス計算を支配するアルゴリズムの同一性を意味する。対象計算にふくまれるすべての論理学的問題が、直接に、つまりクラス計算が要求しているそれとまったく同一の計算によって解決しうるならば、「外延の論理学は余計なものである。」

しかし、この例証は省略する。ただ、(I a)の表記、 $(x)(S(x) \supset P(x))$ について若干補足を加える。この表記は、フッサールの対象の論理学が、現代論理学の述語論理学と異なるものでないことを意味する。たしかに(I a)の解釈は「内包の量化なしの」解釈であると明言されている。彼自身の表記は「 $S=(=P)$ 」である。量化記号は与えられていない。しかし、まず、量化されていないのは「内包」であって「対象」ではない。次に、「概念Sの或る対象は、そのかぎりで、概念Pの対象でもある」、「或るものが弁別特性Sをもつかぎり、それは特性Pをも持つ」という解釈の限定「そのかぎりで」、「……かぎり」は、その「或る」が、「任意の或る」、「すべてのx」を含意しているとする解釈を許す。量化記号を明示するか否かは表現の問題である。述語論理学の表現は、対象についての内包的表現である。これは対象についての外延的表現であるクラス論理学の表現と等価ではあるが、それと同一ではない。すなわち自然な論理的思考の直接的表現として(クラス論理学への迂回なしに)機能しているのである。

フッサールの「内包の論理学」の構想は、けして曖昧かつ特異なものではなく、現代「述語論理学」の解釈と一致する。クラス論理学への迂回の不可避性、内包的解釈に基づく純粋形式的推論計算の不可能性は、述語論理学の存在によって反証されている。

次に、概念の位置を判断が占める場合、つまり「命題論理学」についても完全な類比が成立し、そこに同一のアルゴリズム技術が基礎づけられる(C.L., p.87)か否かが問題となる。以下に、フッサールによる命題論理学の公理系を提示する。ただし、現代の命題論理学との関連性を示すために、フッサールの記号表現によらず、また若干、解釈と修正を加えた。(pp.88-91)

〔記号〕「 $p \supset q$ 」は、

「もし命題pが真なら、命題qは真である」「命題pが命題qを条件づける」

と読む。

〔定義〕

- I. $(p \equiv q) = df (p \supset q) \cdot (q \supset p)$
- II. $p \cdot q = df p$ かつ q の同時的真
- III. $p \vee q = df p$ あるいは q の、ときには両者同時の真
- IV. $T = df$ 恒真命題
- V. $F = df$ 恒偽命題
- VI. $\sim p = df$ pの偽

〔公理〕

- I. $p \supset p$
- II. $(p \supset q) \cdot (q \supset r) \supset (p \supset r)$
- III. $(r \supset p) \cdot (r \supset q) \supset (r \supset p \cdot q)$

IV. $(p \supset r) \cdot (q \supset r) \supset (p \vee q \supset r)$

V. $p \supset T$

VI. $F \supset p$

VII. $p \cdot \sim p \supset F$

VIII. $T \supset p \vee \sim p$

この公理系（計号，定義，公理）は，命題論理学成立の不可欠な条件をみたしている。しかも，累同律，結合律，とくに交換律，分配律が，連言，選言，含意，等値の定義によって，つまり，「諸記号の意味」に訴えることによって，「直接的公理」として与えられる（C.L., p. 83）のであれば，十分すぎる条件である。その意味で洗練されたものとは言えないが，外延への迂回の不可避性を拒否するフッサールの命題論理学が特異なものではなく，今日の命題論理学と同一の解釈，同一のアルゴリズムに基いていることは明らかである。

『算術の哲学』の評価

フッサールの「内包の論理学」の構想の素描は，彼の対象計算および命題計算が，現代述語論理学および命題論理学と同一の解釈，同一のアルゴリズムに基づくことを理解させた。何故，彼は「内包」による解釈に固執したのか。第一に，自然な論理的思考からの疎隔を回避するためであり，第二に，論理学を直接かつ根源的構成作用のうえに基礎づけるためである。フッサールの現象学の源流を，処女作である『算術の哲学』のうちに求めうるのは，その故である。しかし，この試みは，著者自身の自己批判のゆえに，異論を呼びうる。それゆえ，「『算術の哲学』を，フッサールの思索のうちにどのように位置づけるべきか」が問題である。

この作品は，所謂「心理主義」の名のもとに，フッサールの思索の軌跡から抹殺さるべき誤謬の墓碑銘であるかに思われる。『論理学研究』第一巻の序言は，訣別の宣言である。それは，演繹科学たる論理学の哲学的解明を心理学に期待した『算術の哲学』の確信の決定的動搖の告白である。（H.U. XVIII., S. 6 f）すなわち，『算術の哲学』でなされたフレーゲの反心理学主義に対するフッサールの原理的批判は，著者自らによって是認を拒まれるのである。（H.U. XVIII., S. 172）それは，第二巻の続刊という当初の計画を断念された廃絶の書である。それゆえ，かかる著作に，その思索の原点を求めることは無謀と言うべきである。

だが，後年のフッサールのうちには，意外な評価が見られる。『形式論理学と超越論的論理学』によれば，『算術の哲学』は，第一に，数論や集合論が，いかなる実質規定も顧慮せず，「空虚な普遍に関係づけられている」（H.U. XVII., S. 81）ことを明らかにし，「形式的なものとは何か」を問うことの意味をはじめて理解させた作品である。第二にそれは，「概念の起源」への探求によって，概念（数）や判断が，構成する能動的自発性としての「数える」「判断する」の「理念的相関者」であることをはじめて教えたのである。

（H.U. XVII., S. 87 f, c f. S. 84 f）すなわち，それは，「処女作としてきわめて未熟なものではあったが」，「自発的活動への還帰によって」「諸概念の本来的な，根源的に真正な意味を獲得しようとする最初の試み」であり，すでにして「現象学的構成的研究」であった。したがって，それは，範疇的対象性が「作品」(Leistung)であることを，その作品を「製作する」(leisten) 根源的な活動，すなわち「『構成する』志向的能動性」を浮彫りにすることによって理解させようとした最初の研究であった。（H.U. XVII., S. 90 f）

『形式論理学と超越論的論理学』は，著者自身によって公刊された最後の論理学書である。それゆえ，辿られた錯綜する思索の軌跡にひと筋の赤い糸をつらぬかせるために，処女作に過大な評価が与えられたのかも知れない。しかし，何故に，かくもはれがましい評価が「可能であったのか」と問うことは，『算術の哲学』の意味を問いなおすことであるばかりでなく，現象学の意味を問いなおすことである。ゲーテの言葉，「ひとはやっとな脱却した誤謬に対しては最も厳格である」（H.U. XVII., S. 7）が真であるなら，フッサールの自己批判の厳しさにすがるて，この問いを免除されたと思ってはならない。就職論文『数の概念について』（1887）を含む『算術の哲学』は，彼の哲学的思索の原点である。それは，「何故に彼は数学者であり続けなかったのか」，「何故に形式論理学者でなく哲学者を志ざしたのか」，すなわち，「数学および形式論理学と，哲学および認識論の差異は何か」という問いに，萌芽の姿で答えている。たしかに，フッサール

の思索の歩みに不連続を認めることは可能である。むしろ“Durchbruch”こそ、そのスタイルを決定するものである。『論理学研究』第一巻は、まさに「突破口となった著作」（H.U. VIII., S. 8）だったのである。すなわち、『論理学研究』の推薦がなされていた1898年ごろに、経験の対象と所与性様式のあいだの「普遍的相関関係のアプリオリ」の「最初の Durchbruch」があったのである。（H.U. VI., S. 169）さらに、『論理学研究』発表の数年後には、『イデーニ I』（1913）で哲学的体系化が試みられた「現象学的還元の最初の Durchbruch」があった。（H.U. VI., S. 170）「相関のアプリオリ」の発見は、それ以後のフッサールの全生涯を支配する徹底的転回を要求した。「現象学的還元」の発見は、昏迷した思索の闇にひらめく天啓の光りであった。『イデーニ I』は草案もなく、「いわば恍惚のうちに」一挙に書きあげられたのである。（H.U. VIII., S. XIV）しかしこれらの Durchbruch が、決定的意味を持ち、心理主義の批判と論理主義の称揚が終りでなかったのは、論理的形象の客観性の承認だけでなく、構成する主観性との相関関係においてそれを捉えることが課題であったからにほかならない。それは、『算術の哲学』において、すでに開始されていたのである。

フッサールの定義論

フレーゲの反心理主義に対する原理的批判が、もはや認されえないことは、「あらためて言うまでもない」とされた。しかし、まさにその点を再考すべきなのである。もはや認されえないものと、依然、思索の底流をなすものとを区別すべきである。自己批判されたのは、心理学による論理学の基礎づけである。堅持されるのは、「内包の論理学」と、志向的能動性の構成による根源的起源の探求である。

『算術の哲学』のフレーゲ批判（H.U. XII. S. 118—125）は、数ならびに概念一般の「定義」の問題に集中する。「心理学は、算術の基礎づけに何事か寄与しうるなどと思誤まることはしない」と語るフレーゲの理想は、そのすべての定理を推論によって演繹しうる「一連の形式的定義のうえに算術を基礎づける」ことである。フッサールはこれを承認しえない。なぜなら、すべての概念が定義しうるわけではなく、「定義しうるのは論理的に合成されたものだけである」からである。定義しえない概念に対しては、具体的諸現象を呈示し、当該概念がそこから抽象される過程を明らかにすることしかできない。そしてこれが有益かつ必要であるのは、概念を表示する名辭が、それだけでは理解に十分でないに過ぎない。数概念は、まさにそのようなものである。それゆえ、「数概念の論理的定義を与えるかわりに、『これらの概念にひとが到達する仕方を記述する』」ことが、それ自体批難にあたらないわけではない。（H.U. XII., S. 119）個数概念は、多と一という定義しえない基本概念と密接に関連している。したがって、個数概念に基づく算術を、定義によって基礎づけようとするフレーゲの理想は、キマイラのようなものである。それが、過度の精緻と、実りなき成果に終るのは当然なのである。

フレーゲは、「個数」（Anzahl）概念を「等数性」（Gleichzahligkeit）の定義によって定義する。これは、既知の「等しさ」の概念から「等しいもの」を定義する、一般的論理学的方法、「等価理論」（Äquivalenztheorie）の特殊事例と見なされる。『算術の基礎』（1884）によれば、相等性の特殊事例である等数性は、「一方の概念にふくまれる対象と、他方の概念にふくまれる対象を相互に『一意対応させる』（eindeutig-zuordnen）可能性があるとき、概念Fは概念Gと『等数である』と言う」と定義される。この等数性の定義から個数の定義が与えられる。すなわち、「概念Fに帰属する個数は、『概念Fと数が等しい』という概念の外延である。」（Frege, II., S. 79 f）フッサールによれば、かかる方法は、論理学の内容をより豊かにすることはできない。なぜなら、それが定義しうるのは、「諸概念の内包ではなく、それらの外延である」（H.U. XII., S. 122）からである。さきの定義が無価値であるのは、それが「概念の内包と起源」についての、いかなる経験も与えないからである。概念の内包と起源の問題こそ、あらゆる難問の源泉である。概念が、「哲学者と数学者の十字架」となるのはこのゆえである。（H.U. XII., S. 124）

『算術の哲学』におけるフレーゲ批判は、次の二点に総括しうる。まず第一に、定義不可能な概念がある。それについては、具体的諸現象を呈示し、抽象過程を明らかにすること、すなわち、その概念の起源、発生、歴史、経験内容、経験様式を記述することしかできない。ところが、第二に、等価性による概念の定義は、外延を確定するのみで、「……とは何か」という問いに答えず、概念の内包、その概念によって理解されている内容を与えない。

これらの批判は、結局、「定義されえない概念」の存在に依拠している。それゆえ、おそらくは『算術の哲学』第二巻の一部を構成するはずであった論文『記号の論理学（記号論）』（Zur Logik der Zeichen (Semiotik), 1890)によって、フッサールの定義論を検討することにしよう。まず、「定義」とは何かが定義される。すなわち、「定義とは、外的な記号の意味 (Bedeutung) を同じ種類の等価な記号によって表現する命題である。」したがって、「記号のうちで表現しうろいかなる意味も持たない」記号は、「定義しえない」記号である。これを理解するために、「等価」、「外的記号」、「直接的記号」等の意味を明らかにしよう。(H U. XII, S. 340—344)

- (1) 「同一の記号」——同一の対象を同一のしかたで指示する二つの記号は同一である。
- (1)' 「等価な記号」——同一の対象を異なるしかたで指示する二つの記号は等価である。
- (2) 「外的な記号」——指示されるものの特殊な概念、内容、諸属性と何のかかわりも持たない記号。
- (2)' 「概念的記号」——指示されるものの徴表を媒介にする記号。
- (3) 「直接的記号」——媒介なしに事象と結びつく記号。その記号が意味する (bedeuten) ものと、指示する (bezeichnen) ものが一致している。
- (3)' 「間接的記号」——他の記号を媒介にする記号。意味するものと指示するものが、必然的に分離される。

まず、「直接的記号」が定義されうる記号から排除される。なぜなら、かりにそれが意味を持つとしても、他の記号の媒介がないために、その意味を他の記号によって表現することはできない。

次に、「概念的記号」も定義されえない。それは、他の記号の媒介によって対象を指示する間接的記号であり、それゆえ、他の記号によって表現される意味を持っている。しかし、概念的記号と、媒介となる概念的徴表とは分離しえない。媒介となる概念的徴表を表現する他の記号とは、まさに当の概念的記号にはかからない。ゆえに二つの記号は同一である。

したがって、定義しうる記号は、残された「間接的かつ外的記号」のみである。それは、間接的な記号であるから、他の記号によって表現されうる意味を持つ。さらに、外的な記号であるから、指示されるものの内容、媒介となる意味に何のかかわりも持たない。それゆえ、同じ意味を、他の記号、すなわち、やはりその意味と何のかかわりも持たない外的な記号によって表現しうる。これが、真に形式的な論理学の意味での定義である。すなわち、すべての記号等価が定義なのではない。定義は、記号等価の特殊事例にすぎない。

「定義」についてのフッサールの定義を理解するためには、これで十分である。この理解にしたがえば、たとえば、「 $p \cdot q = df \sim (\sim p \vee \sim q)$ 」は定義であるが、「 p かつ q とは、 p でないか q でないかということはない、ということである」は定義でないことになろう。なぜなら、「 p かつ q である」を表象することと、「 p でないか q でないか、ということはない」を表象することは違ったことだからである。これに対し、外的な記号である「 \cdot 」「 \vee 」「 \sim 」の意味は、定義によって初めて知らされるのであって、その記号から直接表象することはできない。その意味は、定義によって初めて与えられる。しかし、定義はまったく意味を持たない空虚な記号（本来の記号とは言い難い構文論の記号）の置換規則の叙述ではない。定義が問題となるのは、意味論の水準である。しかし、定義は、意味の異なる概念的記号の単なる等価関係（外延の同一性）の叙述ではない。定義される記号の意味は、定義以前には直接表象されず、その意味を表現する他の等価な外的記号（その意味も直接表象されない）によって、いわば初めて誕生し、始動するのでなければならない。(それゆえ、さきにかかげた公理系の〔定義〕、たとえば「 $p \cdot q = df p$ かつ q の同時的真」も、厳密に言えば、〔定義〕ではなく、〔記号〕であることになろう。) フレーゲはフッサールを批判して、「あらゆる批難をのがれようとするれば、おそらくあらたに語根を創造し、そこから語を形成しなければならなかったことだろう」(Frege. VI., S. 319)と語っているが、これは不条理なことではなく、まさにそうしなければならないのである。既知の自然言語のうちに位置を占める概念的記号、一般名辞も、もし、その記号がいかなる特定の内容もあらかじめ表象させないかのごとく、その意味が知られていないかのごとく、そればかりか、それが何も意味しないかのごとく振舞うならば、定義の対象になりうるだろう。定義は異なる記号の意味の同一性の擬制である。しかし、この「かのごとく」がまったくの恣意であるなら、遊戯にすぎない。意味は永遠に誕生して来ない。言語であるかぎり、それらは、自然言語のうちに意味の源泉を見出すであろう。

フレーゲの定義論

『算術の哲学』に対するフレーゲの『書評』（1894）は、「心理学の論理学への侵入」（Frege. V., S. 332）の告発である。すなわち、「表象」概念の曖昧性、主観的なものと客観的なものの混同、の批判である。たとえば、一意対応による等数性の定義に対するフッサールの拒否の根拠は、表象の違いである。数の等しい多の表象と、多の要素相互の一意対応の表象とは、「ひとつの同じことがらではない。」（HU. XII., S. 99）フレーゲによれば、まさにこの点に、「心理学的論理学者と数学者の分裂」（Frege. V., S. 319）がある。心理学者にとっては、語の意味が問題である。しかし、これは表象と区別されない。論理学者にとって問題なのは、語が指示する事象そのものだけである。それゆえ、もし、概念でなく外延が定義されることが批難されるべきなら、それは、そもそも、「数学のあらゆる定義にあてはまる」と言わざるをえない。数学者の関知しない、意味や表象の差異に執着する心理学的論理学者には、定義および「等しさ」一般に対する理解がまったく欠如しているのである。それゆえ、彼らにとって、この関係は深い謎につつまれている。彼らは、「AはBと同じである」と言えない。なぜなら、そのためには、AとBの区別が必要であるが、そのとき、それはまさに異なる表象だということになるだろうからである。

しかし、「表象」については、そもそも、差異も同一も語ることはできないのである。なぜなら、二つの表象の差異や同一は、同一の意識のなかでの比較を前提するからである。だが、各人は各人の表象を持つのみで、他人の表象を持つことはできない。ゆえに、自己の表象と他人の表象の一致ないし差異は知りえない。（Frege. V., S. 317）

フッサールの語る「表象」は、表象内容、概念の内包、表現の意味である。表現をその意味から問題とすれば、二つの表現は、(1)同じ意味を持つか、(2)異なる意味を持つか、いずれかでしかありえない。(1)のばあい、定義によって等しさを指定することは無用であり、「歴然たる循環」である。(2)のばあい、その定義は偽である。定義は、意味を分解することさえできない。分解された意味は、もはや本来の意味ではないからである。定義においては二つに一つである。(1)「歴然たる循環」——定義する表現において思考されるすべてのことが、説明さるべき語においてすでに明白に思考されている。あるいは、(2)「偽なる定義」——定義する表現の方が、説明さるべき語よりも、詳細かつ分節された意味をもっている。偽でも自明でもない定義は不可能であるかに思われる。それゆえ、定義がこのような批難をのがれうるのは、説明さるべき語がまったく意味を持たないか、定義によって初めて意味が与えられるのだから、現在はそのような意味はないものと考えるべきことが明言されているばあいのみである。（Frege. V., S. 319）

しかし、既述のように、これは不条理ではない。概念的表現の定義不可能性の主張が、必然的に、自明な定義か偽なる定義かの択一を要求し、その結果、あらゆる定義の可能性を閉ざしてしまう訳ではない。これがフッサールの定義論であった。フッサールが真に形式論理的定義（自明でも偽でもない唯一の定義）として承認するのは、定義によって初めて意味が誕生するような定義（フレーゲが不条理と考える定義）である。そして以下に見るように、フレーゲ自身による定義されえない概念の承認を確認できるかぎり、彼の批判も、表象の主観性と概念の客観性の関係の問題を越えて、決定的意味を持つことはできない。

フッサールは、その自己批判の宣言にあたって、フレーゲの『算術の基礎』と、『算術の基本法則』第一巻（1893）序言の参照を請うている。『算術の基礎』の原則は、つぎの三点である。(1)論理的なものとして心理学的なもの、客観的なものと主観的なものの分離。(2)語の意味する (bedeuten) するものを、個々別々にでなく、命題の連関のなかで問うべきこと。(3)概念と対象の区別。（Frege. II., S. XXII）それゆえ、たとえば、定義を与えようとしながらそれを与えられないとき、「当該の対象や概念にどのようにしてたどりついたのか、すくなくともそのありさまを記述しようとする」（Frege. II., S. XX）ことや、「概念の歴史」と言いながらその実、概念や語の意味についてのわれわれの「認識の歴史」を記述するようなこと（Frege. II., S. XIX）は、論理学や算術の基礎づけに何らの貢献もなしえない心理学的考察法にすぎず、排除されなければならない。

『算術の基本法則』第一巻によれば、「算術とは、高度に展開された論理学にすぎない。」（Frege. IV., S. VII）論理学の一分科である算術は、経験からも直観からも、何らの証明根拠をひきだす必要はない。算術の対象である数は、感覚的に知覚されえない存在、したがって非現実的な存在である。にもかかわらず、

主観的なものではなく、客観的なものである。さらに、真であることは、真とみなされることとは別のことである。(Frege. IV., S. XV) それは、時と所をもたず、判断する人に依存しない。しかるに、心理学的論理学者にとってはそうでない。(Frege. IV., S. XVI) 数学者の定義するのは、対象、概念、関係である。ところが、心理学的論理学者は、表象の生成の変遷に心をうばわれている。彼らにとっては、表象の本質を再現しない数学者の定義は、ばかげたものにしかならない。(Frege. IV. S. XXV) そもそも、論理学が心理学を必要とすること自体、すでに誤謬の徴候である。まさに心理学こそが、論理学の原則を必要としているのだからである。(Frege. IV. S. XIX)

フレーゲによる心理主義批判、論理学の客観性の主張は、それ以後のフッサールを決定的に方向づけるものであった。『論理学研究』が、第一巻『純粋論理学序説』としてデビューしたのはそのゆえである。しかし、これを全面降伏とみなすならば、第二巻『現象学と認識論のための諸研究』(1901)の出現は、「論理主義の心理主義への回帰」という不可解事にならざるをえない。フッサールの論理主義は、概念の起源の探求の放棄、したがってまた、定義しえない概念の存在の放棄を含意するものではなかったのである。

この点を明らかにするために、フレーゲの定義論を徹底的に検討する必要がある。『概念表記』(1879, Frege. I.)や『算術の基礎』(1884)のフレーゲは、「定義」そのものについて、さほど慎重な配慮をしていなかったように思われる。これに対し、『概念と対象』(1892)は、「定義されえないもの」に敏感である。「論理的に単純なものは、そもそも定義しえない。」なぜなら、それは分解しえないからである。すべての物質を分解することを化学者に要求しえないように、論理的なものがすべて分解しうるわけではないのである。そのとき、残された道は、その語によって思念されていることを理解してもらうために、読者や聴衆に、「めくばせする」以外にない。(Frege. III., S. 67)『算術の基本法則』第一巻(1893)によれば、本来そのものとしては定義しえない論理的に単純なものへと帰ってゆくことが、算術の基礎づけをめざす者の努めであるべきであるがゆえに、「すべてのものを正式に定義することは、かならずしもいつも可能なわけではない。」(Frege. IV. S. 4)そして、第二巻(1903)によれば、第一巻における基本記号についての確認は、定義とみなすことができない。論理的に単純なものについては、「暗示しうる」にすぎないのである。(Frege. IV. S. 148)さらに、『関数とは何か』(1904)によれば、そのような定義できないものに対しては、「思っていることを比喩的な表現によって暗示する」(Frege. III., S. 90)ことしかできない。すがるべき唯一の頼りは、読者の理解、「意を酌む」ことである。最後に、『思想』(1918)によれば、たとえば、「真」という語の内容は、比類を絶し、定義しえない。(Frege. VI., S. 32)このような流れのなかに、『算術の哲学』の発表された1891年という年が、位置づけられる。

「定義しえないもの」についてのフレーゲの主張は何を意味するだろうか。『思想』をふくむ、論文集『論理学研究』(1966)の編者、G・パツィッヒは、序文においてつぎのような批判を与えている。すなわち、論理的な基礎概念はどれも、あらかじめ与えられた永遠の「自然定数」(Naturkonstant)ではない。何が根本概念であるかは、選択される言語体系によってそのつど異なる。それゆえ、すべてが定義されることはありえないとしても、それは、いかなる定義体系においても原理的に定義しえない特定の概念が存在することを意味しない。そのつどの体系は、定義しえないものをそのつど前提せざるをえないが、それを別の定義体系において導出することは不可能でないはずである。いかなる体系においても定義しえない特定の根本概念が存在するか否かは、まだ決着のつかない問いである。(Frege. VI., S. 21)それゆえ、定義されえない概念の存在を説くことは、フレーゲが自己の論理学の体系を、他の体系に卓越し、およそ唯一可能な体系とみなしていることを意味する。「自己の体系のうちで定義されえないもの、それを彼は原理的に定義しえないものとみなしているのである。」(Frege. VI., S. 22)

批判されるように、ある言語体系では定義されえず、それゆえ根本概念と見なされる概念が、他の言語体系では定義されうる派生概念であることは可能である。したがって、いかなる言語体系のうちで語られているのか、という問いが決定的な意味を持つことになろう。しかしながら、他の言語体系との択一を許さない体系、われわれがかってに選ぶことのできない体系、それゆえ、唯一かつ比類なき言語体系は考えられないのだろうか。すくなくともわれわれの自然言語は、多数の可能な人工言語の諸体系のうちの一体系なのではない。『概念表記』によれば、純粹思考の形式言語と自然言語との関係は、顕微鏡と眼の関係との類比によ

て説明しうる。眼は、多くの不完全性にもかかわらず、その可動性のゆえに、顕微鏡にくらべはるかに卓越している。顕微鏡は截然たる区別という科学の目的に完全に適合するが、「まさにそのゆえに他のすべての目的に使えない。」(Frege. I., S. XI) それゆえ、フレーゲにとって、形式言語は、生活の言語の欠陥を補うものではあっても、それから隔絶したものではありえなかった。論理学が、言語や文法にあまり密着しすぎてきたことを批判する(Frege. I., S. XIII) フレーゲもまた、文法、とくにドイツ語のそれをモデルとして、自己の基本概念を形成していたのである。したがって、もしフレーゲが自己の言語体系を唯一可能な体系と見なしていたということが真であったとしても、可能な形式言語体系のあいだでのその卓越性は、それが生活言語に基づいているかぎりでしかなかったろう。定義しえないものは、自然言語のうちで定義しえない根本概念であったからこそ、彼の体系のなかでも定義しえなかったのではなかろうか。そしてもし、この自然言語を個々の国語に限定することを差し控えるならば、そのことは、普遍言語の基盤である生活世界の経験への還帰を意味することになる。「目くばせ」や「暗示」「比喩」がすすめることのできる唯一の基盤は、語りつつ最後に理解しあう人間の世界としての言語共同体、「すべての人にとっての世界、『だれもが』世界地平として持つ世界」(H.U. VI., S. 370)である。フッサールは、『算術の哲学』において、身近かなもの、それ自身においてよく知られているものを、疎遠なもの、なじみのないものによって晦ます「定義」を批難している。(H.U. VII. S. 99) 直接的な「等しさ」の概念を、迂遠な、「一意対応」によって定義するのがそれである。答えがあまりに身近かにあるとき、それはあまりにありふれたものに思われる。それゆえ、その答えが回避され、迂遠な人工的構築が試みられる。かくて、算術の基本概念を最終的かつ定義された徴表から構築することが理想となり、概念の自然な解釈が変えられ、捨て去られるに至る。そして、「ついには、実践にとっても、科学にとっても等しく無用な、まったくなじみのない概念形成をもたらす」(H.U. VII., S. 118) ことになろう。もし、フレーゲの思索の流れのうちに、このような批判ののがれゆく歩みを跡づけたいとするならば、フレーゲにおいても、「形式論理学の始源的条件を顕わにする」「現象学」(Eley., S. 82)を見いだすことが、許されるのである。

結 論

この論考の意図は、フッサールの現象学の意味を理解するために、変貌する思索の軌跡、それをつらぬく主旋律を探りあてることであった。連続性を追求するかかる意図のゆえに、その切断、もろもろの「Durchbruch」の独自の意義が不鮮明となり、単なる変奏曲以上のものとしてえがかれなかった憾みが、当然のことながら残る。また、その意図にもかかわらず、「定義」の問題をめぐる限られた地平にしか、主旋律を鳴りひびかせることができなかった。ともあれ、「現象学と内包の論理学」という標題が示唆するように、主題は「内包の論理学」である。これを明らかにするために、まず、フッサールの内包の論理学の構想が素描された。これによって、その構想が特異な曖昧なものでも、実現不可能なものでもなかったことが示された。さらに、すでにそこに、自然的な論理的思考、直接的経験への回帰の主題が、外延への迂回の拒否として、ひびき始めていたことを見た。『算術の哲学』における、「心理学による論理学の基礎づけ」は、「内包の論理学」の構想なしでは不可解である。論理学を外延の計算に必然的に限定するかぎり、概念の起源、それに内容を与える志向的態動性の追求は、関知せざることだからである。それは、閉じられた体系としての論理学の存在様式への無知、論理学者失格を意味する。しかし、このような論難のうちに、フッサールは哲学者失格を見るだろう。ところで、『算術の哲学』のうちに、高鳴る主題を聞く者にとって、著者の自己批判、その心理主義批判の宣言は、越え難い躓きであり、この躓きに十分、躓くことが必要である。しかし、小論はその制限された意図のゆえに、理念的対象とその構成について、詳論することはできなかった。(『意味の理念性』)

ここでは、既に『算術の哲学』のフッサールが、素朴に心理主義者であったわけではなく、それゆえ、心理主義批判もまた、心理学との永別をもたらしたわけではないことだけを述べる。『算術の哲学』によれば、数える作用の「時間的継起」は、数概念形成の「心理学的予備条件」ではあっても、決して数概念の内容そのものを形成するわけではない。なぜなら、数そのものは、「時間的存在」ではないからである。(H.U. VII., S. 25—34) したがって、現象の「心理学的記述」と現象の「意味の陳述」、「意味の基底」(現象)と「意味そのもの」との峻別が要請されることになる。(H.U. VII., S. 309) たしかに、『算術の哲学』は、それ

にもかかわらず、この「認識作用の主観性と認識内容の客観性との相互関係」(HU. XVIII, S. 7)について語る、決定的な表現と方法を見いだすに至っていない。フッサールの思索の変貌は、この言葉と方法を求め続けた苦闘の軌跡にほかならない。心理主義についての自己批判も、心理学と現象学の関係を、絶えず問いかえされるべき生涯の課題たらしめたにすぎないのである。(HU. IX) その意味で、形式化による意味の空洞化、科学の危機への警鐘、科学の意味基底たる生活世界への還帰の主張(HU. VI, S. 45-54)も、既に『算術の哲学』のうちで始動していた運動の顕現だったのである。

他方、定義をめぐるフレーゲの批判も、フッサールに内包の論理学の構想を放棄させるほど徹底したものではありえなかった。このことをわれわれは、批判者自身による「定義されえない概念」の承認を確認し、この概念の意味諒解に不可避であるとされる比喩や暗示のすがるべき唯一の基盤が、生活言語の世界にほかならないことを見ることによって、示そうとしたのである。フッサールの自己批判、論理主義の宣言は、内包の論理学の堅持と両立していたのである。それゆえ、『論理学研究』第二巻以後の現象学も、心理主義への回帰を意味するわけではなく、むしろ、内包の論理学への志向を徹底させたにすぎないのである。

現象学の深化は、内包の論理学の徹底によってのみ、可能となったのである。

はたして、内包の論理学の徹底は、現象学の深化によってのみ可能となるのだろうか。

〈文献〉

(1) Edmund Husserl

C. L. : Le calcul de la conséquence et la logique du contenu (Der Folgerungskalkül und die Inhaltslogik, 1891), Articles sur la logique (pp. 62-91), Paris, P. U. F., 1975.

HU. VI. : Die krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie, Husserliana VI, Haag, Martinus Nijhoff, 1962.

HU. XII : Philosophie der Arithmetik (1890-1901), Husserliana XII, Haag, Martinus Nijhoff, 1970.

HU. XVII : Formale und transzendente Logik (1929), Husserliana XVII, Haag, Martinus Nijhoff, 1974.

HU. XVIII : Logische Untersuchungen, Erster Band, 1. und 2. Auflage (1900, 1913), Husserliana XVIII, Haag, Martinus Nijhoff, 1975.

(2) Gottlob Frege

Frege. I. : Begriffsschrift (1879), Hildesheim, New York, Georg Olms, 1971.

Frege. II. : Die Grundlagen der Arithmetik (1884), Hildesheim, Georg Olms, 1961.

Frege. III. : Über Begriff und Gegenstand (1892), Was ist eine Funktion? (1904), Funktion, Begriff, Bedeutung, Fünf logische Studien, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1969.

Frege. IV. & Frege. V. : Grundgesetze der Arithmetik, Bd. I (1893) & Bd. II (1903), Hildesheim, Georg Olms, 1966.

Frege. V. : Rezension von E. Husserl; Philosophie der Arithmetik, (1894), Kleine Schriften, Hildesheim, Georg Olms, 1967.

Frege. VI. : Der Gedanke (1918), Logische Untersuchungen, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1966.

(3) その他

Eley. : Lothar Eley; Metakritik der formalen Logik, Phänomenologica 31, Haag, Martinus Nijhoff, 1969.

『意味の理念性』: 矢島忠夫『意味の理念性』, 弘前大学教育学部紀要, 第39号, 1978.

(昭和53年11月27日受理)